

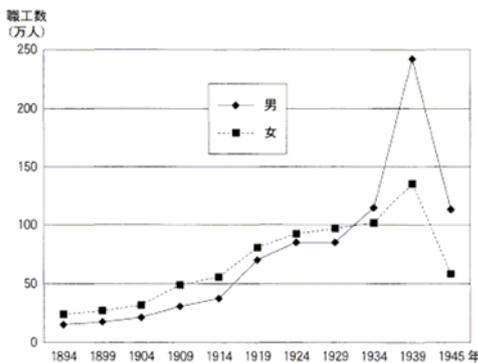
強者の戦略

こんにちは、日本史の岡上です。いやあ、本当に寒くなってきましたね。冷たい風に身を縮めると同時に、身体に緊張感が宿るよう。受験の足音が迫ってきています。

さて、1週間が経ちました。解答は仕上がりましたか？

今回取り上げた東大日本史の第4問は近現代からの出題で「工場労働者の男女比からみる産業構造」がテーマの問題でした。グラフの読み取り、そして社会経済史の分野という点では、この「東大日本史のみかた 第4回」でも取り上げた、2009年度の第4問を思い出した方もいるかもしれません。ただし、今回の問題はグラフの読み取りの精度が大きく解答に影響を与える形式になっています。皆さんのなかにもグラフの読み取りが甘く、ひょっとすると不十分な解答を作成してしまった方もいるかもしれません。ということで、今回はグラフを正確に読み取りながら、解答に迫っていきましょう。

<工場労働者の男女比からみる産業構造>



(1)

設問A

1920年代まで女性の数が男性を上回っているが、これはどのような事情によると考えられるか。当時の産業構造に留意して、3行以内で説明しなさい。

設問の要求を検討する前に、まずは1920年代までのグラフを読み取っていきましょう。1894年から1929年のグラフの動きに注目してください。男女ともに職工数が増えていることがわかりますね。1894年といえば日清戦争の年であり、その前後が軽工業、特に繊維工業を中心とした産業革命の時期であることは容易に答えることができるのではないのでしょうか。例えば、ここで1882年に設立された大坂紡績会社を中心とした紡績業の発達、さらには1897年に輸出綿糸の量が輸入綿糸を上回ったこと、また製糸業においては1894年に器械製糸の生産量が座繰製糸を上回り、日露戦争後はアメリカ向けの輸出が急増し、1909年にはついに中国を抜いて世界一位になったことなどを想起できれば、ばっちりですね。

そして、繊維工業中心の産業構造においては女性職員の比率が多くなるということも大丈夫ですね。松方デフレによる寄生地主制の進行が、農村から大量の低賃金労働者＝女工を創出する契機となり、その低賃金の労働力が低価格での輸出を可能として日本の国際競争力を高めていた事実。またその一方で、製糸工場における劣悪な労働環境については『女工哀史』、『あゝ野麦峠』などにみられることは受験生であれば周知のことと思います。

さて以上で解答が書けそうなものですが、これだけの読み取りでは不十分です。この問題に限らずグラフの読み取りの際には“特に大きな差異がみられる箇所”に注目するようにしましょう。今回の問題では、1914年から職工数の増加率がぐっと上がっていることに気付かなければなりません。では1914年から1929年には何が起こったのか。1914年といえば、第一次世界大戦。そう、大戦景気ですね。大戦景気においては鉄鋼・機械・造船など重化学工業を中心に発展がありました。重化学工業においては男性職員の割合が多くなりますので、特に1914年から1924年にかけての男性職員の急激な増加は、それを背景にしているものといえます。しかし、それでも女性職員の割合を超えないのはどういうこととし

強者の戦略

ようか。これは大戦景気において重化学工業の成長と同時に繊維工業も成長したことが、その理由と考えられます。例えば、**大戦景気では生糸のアメリカへの輸出が伸長したこと、綿織物においては欧州が大戦で一時後退したため、アジア市場において輸出を増加させたこと**などは教科書にも記載のあるところですね。つまり、大戦景気を経ても日本は一貫して繊維工業が中心の産業構造であったことが読み取れるわけです。

以上をまとめて、解答を作成します。

【解答例】設問A

日本の産業革命は製糸・紡績業など繊維工業中心に展開し、大戦景気を経ても産業構造は繊維工業中心であり、そこでは寄生地主制の進展する農村から低賃金の出稼ぎ女工が多く供給されていたため。(90字)

(2)

設問B

男性の数は1910年代と30年代に急激に増加している。それぞれの増加の背景を、あわせて3行以内で説明しなさい。

続いて設問Bですが、設問の要求が明確ですので、難なく取り組めたのではないのでしょうか。

まず1910年代に男性職工数が急増した背景ですが、これは設問Aでも触れたように、大戦景気とそれに伴う重化学工業の発展ということで大丈夫ですね。少し具体的に補足しておくならば、例えば大戦によって鉄鋼業はもちろんのこと、**世界的な船不足のなか海運・造船業が空前の活況となり、いわゆる「船成金」を生み出したこと、**



またドイツからの輸入が途絶したことによって**薬品・肥料・染料など化学工業が発達した**ことが想起できると思います。国内的には、猪苗代水力発電所から東京間の約200kmの送電に成功するなど、工業発展の前提となるインフラ整備が行われたこともありました。

では1930年代はどうでしょうか。グラフからは、
①1934年に男性職工数が女性職工数を上回った
②1939年にかけては男性職工数が急激に増加している
という2つの現象が読み取れます。

まず①に関しては、**1931年にはじまる高橋是清蔵相の積極財政**を考えることができるとよいと思います。1930年の浜口雄幸内閣時の井上準之助蔵相による金解禁と世界恐慌に端を発した昭和恐慌の後、犬養毅内閣～岡田啓介内閣まで蔵相を務めた高橋是清は、恐慌に対応すべく積極財政を展開し、また円相場の急激な下落を利用して輸出を促進しました。それに加え赤字国債の発行による軍事費・農村救済費を中心とする財政の膨張で産業界は活気づき、**日本は他の資本主義国に先駆けて1933年頃には世界恐慌以前の生産水準を回復**しました。“恐慌の脱出”と呼ばれる状況です。



高橋是清

特に軍需拡大と重要産業統制法など保護政策により重化学工業は発達し、**金属・機械・化学工業合計の生産額は1933年には繊維工業を上回りました**。これがグラフにおいては職工男女比の逆転という形でみることができます。

さらに1931年の柳条湖事件からはじまる満州事変の展開と相まって、朝鮮・満州に日産・日窒など重化学工業を中心とした新興財閥が進出していったことも確認しておきましょう。

一方、②に関しては**1937年の盧溝橋事件からはじまる日中戦争**がその背景にあったことは容易に想像がつくのではないのでしょうか。1938年に国家総動員法が制定され、それに基づく国民徴用令により、

強者の戦略

一般国民が軍需産業に動員されるようになりました。また、1938年からは“経済の参謀本部”と呼ばれた企画院を中心に物資動員計画が作成され、軍需品の生産が優先されたため、重化学工業中心の新興財閥だけでなく、既成財閥系の大企業も積極的に軍需品の生産に乗り出しました。重化学工業の生産は拡大の一途をたどり 1938年には工業生産額全体の過半を占めるようになり、産業構造が軽工業中心から重化学工業中心へと変化しました。これがグラフにおいては男性職員の急激な増加という形で読み取れるわけです。

以上をまとめて、解答を作成します。

【解答例】設問 B

1910年代は大戦景気により鉄鋼・造船・薬品など重化学工業が発展し、30年代には高橋是清による積極財政や満州事変・日中戦争による軍需拡大で重化学工業中心の産業構造となったため。(88字)

いかがでしたか？今回の出題はグラフの読み取りが中心でしたが、ふと思えば解答を作成するプロセスで松方デフレ政策、大戦景気、満州事変、日中戦争など近現代史の基本事項をたどることになりました。東大の問題は資料がしっかりしていることが多いので、ともすると知識を疎かにしがちですが、やはり良い答案、点数の取れる答案を作成するためには盤石な知識が必要であると思います。

さて、いつものように論述問題の解答はもちろん一つではありません。「これはどうだろうか？」「これではだめなのか？」と自分では判断がつかないものは必ず、添削してもらうことをお勧めします。この『強者の戦略ホームページ』でもメールにて質問などを受け付けていますので、どしどし送ってきてくださいね。

それでは次回「東大日本史のみかた」をお楽しみに！！